

ど人と関わることはない仕事かもしれません。しかし、カウンター業務をしていて、何度も利用者のあたたかさにふれることができました。まだ私が勤務したての新人だった頃のことです。閉館直前に、貸し出しの方が多く訪れ、カウンターに列ができてしまいました。まだ機械の操作に慣れていなくてあたふたしながら焦っている私に、利用者の方々は「ゆっくりやればいいよ。」「時間あるから大丈夫だよ。」と、温かい声をかけていただきました。ただ見守って待っていてもらえるだけでなく、温かい言葉をかけていただけて、とても安心しました。また、1年経ち、業務にも慣れてから、閉館の予鈴がなった時に、文献が見つからないから手伝ってほしいと声をかけられたことがありました。本のあるべき場所にはなかったため、あきらめかけながら探し、なんとか見つかることができました。すると、次の勤務の時にその方と

またお会いすると、「この間は時間だったのに本を見つけてくれてありがとう。」と、声をかけていただきました。小さなことでも覚えていてくれて声をかけていただけて、とても心が温かくなりました。わたしは週2日の勤務ですが、毎日のように図書館へ通っている方とは、今ではもうお互いに顔を覚えているように感じます。また、利用者だけではなく、図書館の鍵を管理してくれている警備室に鍵を返しに行くと、いつも警備員さんが「夏休みは帰省したかい?」「今日は寒いから風邪を引かないでね。」と、必ず声をかけてくれます。そんな温かい人に囲まれて図書館で働くことができ、わたしは幸せです。アルバイトをするまでは、図書館は静かで厳粛なイメージでしたが、実際にはもっと気軽に足を運べる場所だったように感じます。これからも、多くの人に図書館を利用してほしいと思います。

(さとう このみ)

本との出会いを楽しむ 第11回

ミステリーを楽しむ

被ばく医療総合研究所教授 柏倉 幾郎



これまでの読書歴を振り返ると、自分は乱読ばりに随分と色々な本を読んできた事を改めて認識しました。その割に余り身になっていないのが問題ではありますが。幼い頃は自宅にあった子供向けの文学全集を繰り返し読んだ記憶があります。そうした中で鮮烈な印象を受けたのが、小学5年生の時図書室から借りて読んだコナン・ドイル著「バスカヴィル家の犬」です。シャーロック・ホームズが登場する推理小説に目覚め、中学に入ると図書室にあった江戸川乱歩シリーズ「怪人二十面相/明智小五郎/少年探偵団」にはまり、その後今に至るまでのミステリーファンです。

浪人時代は、予備校までの片道1時間のバス通の合間に受験対策も兼ね明治以降の日本文学の有名どころはほぼ読破し(受験には役に立ちませんが)、大学時代は海外の推理小説の名作や横溝正史著の「金田一耕助」シリーズを読み漁りま

した。社会人となってからは、江戸川乱歩賞受賞作や年末に発表される週刊文春の「ミステリーベスト10」が、毎年の年末年始の楽しみとなりました。私の場合、その本の世界に没入し、先に読み進みたいがこの時間が終わって欲しくないような矛盾した感覚に囚われる本との出会いが最高です。面白い本は多いのですが、そういった世界にまで誘ってくれる本にはなかなか出会う事が出来ません。最近読んだスティグ・ラーソン著「ミレニアム」は久々の至福の時間となりました。彼の作品は初めてでしたが、既に故人となっていたのが残念です。

また、歴史に興味があるので、史実をもとに作家独自の仮説で物語が展開する作品も好んで読むことができました。契機となった作品の1つが高橋克彦著「写楽殺人事件」でしょうか。触発され、他の作家らによる写楽〇〇説も随分と楽しみました。

また何故か遠ざけていた大御所・司馬遼太郎の作品にも没入出来ました。特に心を動かされたのが、高田屋嘉兵衛の一生を描いた「菜の花の沖」や、村田蔵六（後年大村益次郎と改名）の戦いを描いた「花神」です。両名とも江戸末期や幕末の日本を生き、個人的には畏敬の念を感じる人物となりました。入念な下調べと長い年月をかけての著作は想像を絶しますが、当時の国内外の時代的

背景をもとに、歴史と其中で生きた人物を生き生きと浮かび上がらせてくれる様は圧巻です。偉そうな事を言うつもりはありませんが、目指すべき未来は、歴史にその指針が示されており、「坂の上の雲」も含め多くの作品がまさに「温故知新」を感じさせてくれます。

またこの先どんな本に出会い、どのような世界に誘ってくれるか楽しみです。

(かしわくら いくお)

図書館に関する話題 第11回

文学全集への誘い

教育学部講師 仁平 政人



平成二十四年度文系図書整備予算によって、弘前大学附属図書館に多くの文学者の全集が購入された。具体的には、田山花袋・泉鏡花・川端康成・三島由紀夫・遠藤周作・中上健次といった著名な小説家の新版の全集をはじめ、北原白秋・中原中也・西脇順三郎・田村隆一という近現代を代表する詩人達、近年注目を集めている昭和初期の女性作家・尾崎翠、日本における探偵小説の確立者たる江戸川乱歩の全集など。先に本館に収められていた全集・著作集とあわせて、時代・ジャンルともに幅広い文学者の活動に触れられるようになったと言えるだろう。

さて、図書館の利用者の中でも、文学者関係の全集を手にとったことはないという方は多いかもしれない。ここでは、文学全集が持つ面白さや魅力について、簡単な紹介を試みたい。

文学者の全集と一口に言っても、本人が刊行した著作類を中心としたものから、生前未発表の原稿や日記・書簡を収めたものまで、内容は多様である（中でも『決定版 三島由紀夫全集』は、講演・朗読・歌唱など肉声を収めたCDや、本人が制作・監督・主演を務めた映画『憂国』のDVDまで含み、「文学者の全集」というイメージを大きく超えるものとなっている）。ただいづれにせよ、作家の文章を網羅的に集め、その活動の軌跡を余すところなく示してくれるところに、全集の利点はある。

また、全集に収められた草稿や構想メモなどを見るならば、有名な小説がどのように生れたのかという創造のプロセスに触れることも可能だ。以上のような点で、ある作家の世界に深く触れたい読者や、文学に関わる研究を行いたい学生にとっては、全集は豊かな楽しみや知見をもたらしてくれるだろう。



講演・朗読・歌唱など肉声を収めたCD



本人が制作・監督・主演を務めた映画「憂国」のDVD